

# 保育園児の保護者から見た交流保育と障害理解

——特別支援学校幼稚部との交流実践から——

大伴 潔\*・橋本 創一\*・工藤 傑史\*\*・高野 裕美\*\*  
田口 悅津子\*\*・渡邊 貴裕\*\*・池尻 加奈子\*\*・浮穴 寿香\*\*\*  
細川 かおり\*\*\*\*・伊藤 良子\*・安永 啓司\*\*

(2007年11月30日受理)

OTOMO, K., HASHIMOTO, S., KUDO, T., TAKANO, H., TAGUCHI, E., WATANABE, T., IKEJIRI, K., UKENA, Y., HOSOKAWA, K., ITO, R. and YASUNAGA, H. ; Inclusive Education as Evaluated from the Viewpoints of Parents of Typically Developing Children and its Influence in the Understanding of Disabilities: *Inclusive Child Care Practice of a Special Support School.*

ISSN 1349-9580

Inclusive education for preschool children, where children with disabilities are mainstreamed into a group of typically developing children in preschool settings, has been reported to be beneficial for both children with and without disabilities. The kindergarten division of the Special Support School affiliated with Tokyo Gakugei University, in collaboration with a neighboring nursery, provides an inclusive education program, where the children of the kindergarten division join the nursery on a weekly basis. This study investigated via questionnaires the parents' recognition of the inclusive education program and the children with special needs, and sought opinions about the future direction of the program. Results showed that all parents viewed the program positively, and that many typically developing children report to their parents about their peers with special needs. It was suggested that creating settings and devise strategies to enhance peer-interactions further enhance the parents' understanding of disabilities.

KEY WORDS : Special Support Education, Inclusive Education, Disabilities, Parents

\* Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

\*\* Special Support School, Tokyo Gakugei University

\*\*\* The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

\*\*\*\* Tsurumi Junior College

## 1. はじめに

障害のある幼児とない幼児と一緒に保育する実践として、障害児通園施設の幼児を幼稚園や保育所（保育園）の障害のない幼児と一緒に統合する交流保育や、幼稚園や保育所の集団に障害のある子どもを交えて保育する

統合保育が各地で行なわれている。このほかにも、障害児が多数を占める逆統合保育といった形態もあるが、いずれの場合でも、通園施設や特別支援学校の中だけでは経験できない障害のない幼児との交流を通して、幼児の社会性や積極性を育むことが期待される。

東京学芸大学附属特別支援学校幼稚部では、週に一

\* 東京学芸大学教育実践研究支援センター 特別ニーズ教育支援部門

\*\* 東京学芸大学附属特別支援学校

\*\*\* 東京学芸大学連合学校教育学研究科博士課程

\*\*\*\* 鶴見大学短期大学部

度、年間約20回、近隣の保育園に幼児と教員が出向いて一日の活動を共有するという交流教育を実践している。この交流プログラムでは、ほかにも保育園の運動会、劇遊びの発表会、遠足などの行事も一緒に行き相互交流を深めている。一日の活動は園庭や保育室などでの自由遊び、造形やリズム遊びなどの課題遊び、年齢ごとの縦割りグループ別の活動などを行い、昼食と一緒に食べて降園するものである。交流には特別支援学校幼稚部の教員も参加し、幼稚部幼児の集団参加を援助したり、保育園児とのかかわりを仲介している。平成18年度からは、幼稚部で馴染んでいる活動を園に取り入れたり、逆に保育園で聴いた曲の一部を幼稚部での遊びに取り入れることも行なわれ、幼稚部の幼児がより交流の場に適応しやすい環境を設定している。

このような実践を客観的に評価するため、特別支援学校幼稚部の保護者にアンケートを実施し、保護者の観点から交流プログラムの成果と課題について検討した（大伴・橋本・工藤ら, 2007）。その結果、ほとんどの保護者が、交流開始に先立ち健常児とのかかわりや集団参加に期待を寄せていたが、同時に大人数の活動への不安や、保育園の子どもからどのように見られるのかという不安を感じる保護者がいることが示された。しかし、このような漠然とした不安は、実際に登園・降園する子どもの様子や、交流の一部の見学、あるいは教員からの報告で、安心感、信頼感へと変容していったことも明らかになった。子どもの変化としては、他児とのかかわりの増加、友達の模倣や意欲の増大、言語表現の拡大など、保護者全員が肯定的に評価しており、半数以上の保護者がその要因として交流経験の影響を挙げている。また、すべての保護者が交流活動の継続を希望していることも肯定感を裏付けていると考えられた。当初は幼稚園との切り替えができなかったり、交流に向けた態度が積極的でない子どもでも徐々に変化が生じたことが報告され、長期的には交流が受け入れられていったことが伺える。親の目から見た交流については、三村ら（2000）の質問紙調査でも検討されており、遊びや活動を通した交流先の子どもの積極的なかかわりや仲介的な存在としての保育者に期待を寄せていることが示されている。

この実践は、交流先である保育園の幼児が障害のある児童をどのように認識しているかという観点からも検討が行なわれている（細川・浮穴・橋本ら, 2007）。保育園児への個別面接調査による言語報告から、年度半ばの9月時点で、年中・年長児（4-5歳児）の7割が提示された幼稚部幼児の写真に対して「学さん」と答え、一人ひとりの名前は言えなくても特別支援学校の児童であることは認識していることが示された。また、2月期の

同様の調査では、一人も名前が言えなかつた児童は9月期から減っており、場を共有する仲間としての認知度が高まつたことが伺われた。この背景には、9月期の調査結果を受けて「学さんのお友だち」という表現から一人ひとりの名前で呼ぶように保育園保育士が心がけるようになったこともあると考えられた。このことから示されるように、保育士側の意識が保育園児の認識にも影響していることが示されたことは興味深い。また、単に所属や名前だけでなく、身体的特徴（首をかしげている、髪を結んでいる、かわいい等）、性格的特徴（おもしろい、元気）、行動的特徴の認知も、遊びや給食といった共有する活動を通して培われていることも伺えた。このように、交流保育は障害のある児童にとって有益であるだけでなく、障害のない児童にとっても障害児への正しい認識をもち人間性を深めるなど、交流の取り組みは参加するすべての児童に意義のある実践であると考えられる。

これまで概観したように、障害児の保護者や交流先の児童の意識を取り上げる試みや、あるいは交流・統合保育に携わる保育者の意識を探った研究はあるが（河内・福澤・濱田, 2006；田川・本谷・津村, 2006）、交流・統合先の障害のない児童の保護者には、何らかの影響があるのだろうか。想定される効果の一つとして、障害理解の深まりが挙げられる。この点について直接検討した研究は見あたらないが、障害理解教育に関する三浦（2003）の報告を参照したい。この研究によれば、障害児教育関連の教職員は「子ども一人ひとりのできること、よいところを知る」という観点を障害理解教育において重視しており、この傾向は教職科の受講生を中心とする大学生よりも強かった。さらに興味深いのは、大学生の中でも障害児との交流経験のある学生の方が、交流経験のない学生よりも上記の点をより重視するという結果である。実際に障害児に接する経験によって、障害児の中でも人としての多様性を知り、各人の個性を尊重し、長所を評価しようという気持ちの変化が生じるのではないかだろうか。交流先の保育園児の保護者に対しても、障害観への影響が見られる可能性がある。そこで本研究では、交流保育を経験する子どもの保護者に焦点を当て、アンケートを介して保護者の交流保育に関する知識や意見を探ることを目的とした。

## 2. 方 法

### 2. 1 対 象

特別支援学校幼稚部と交流を行なっているS保育園の児童（69名）の保護者を対象とした。特別支援学校幼稚部の8名（知的障害児）が週一回保育園に出向いて一

日の活動を共有しており、8名のうち5名はダウン症、3名は自閉症である。交流プログラムの詳細については橋本ら（2006）を参照されたい。保護者に対し、幼稚部との交流保育に関するアンケート調査を保育園と幼稚部との合同運動会の約1週間後に実施した。

## 2.2 調査内容

保護者向けアンケートは以下に示すように、1) 交流についての基礎的な知識と参加、2) 交流についての印象と成果、3) 今後の交流についての意見の3つの柱で構成される。

### 1) 交流についての基礎的な知識と参加

- ① 特別支援学校幼稚部の子どもが、幼稚部の教員とともに週1回、年間20回ほど保育園にやって来て一日を過ごす交流保育を行っていることを知っているか
- ② 子どもは保護者に交流や特別支援学校の児童について話したことがあるか
- ③ 10月14日の合同運動会に参加したか
- ④ 特別支援学校幼稚部の子どもの顔あるいは名前をひとり以上知っているか

### 2) 交流についての印象と成果

- ⑤ 保育園で交流を行うことをどのように感じるか
- ⑥ 運動会のような行事を特別支援学校の児童と一緒にを行うことをどのように思うか
- ⑦ 障害のある子どもについて保育園を通して新たに知られたことはあるか
- ⑧ 今後も交流を継続した方が良いと思うか
- ⑨ 今後も交流を行う場合、保護者としてどういうことを期待するか

## 3. 結 果

全体の68%にあたる47名の保護者から回答を得た。多肢選択回答項目については回答率を求め、自由記述回答については、その内容を整理・分類し、当該の内容を回答したもの数を求めた。

### 3.1 交流についての基礎的な知識と参加

#### (1) 交流保育の実施に関する知識

幼稚部との定期的な交流について知っているかどうかについては、全員が交流保育の実施について知っており、頻繁な交流（年間約20回）であることを知っている保護者は全回答者の83.0%（39名）にのぼった（表1）。

表1 交流保育の実施に関する知識

	頻繁な交流について知っていた	頻度については知らなかった	知らないかった
回答者率	83.0	17.0	0.0

#### (2) 交流に関する子どもからの報告

交流について子どもから報告があるかどうかについては、57.4%（27名）の回答者が、交流や特別支援学校の児童について子どもが話したことがあると答えた。報告の内容についての自由記述からは、一緒に遊んだことだけでなく、子どもの名前を挙げて遊んだことを伝える子どもも多いことが示された（表2）。また、幼稚部の子どもの行動面の特徴や障害について率直に伝える子どももあり、子どもの差別的なコメントを正した経験について言及した回答もあった。子どもから交流を話題にすることはないが、保護者から何をして遊んだのか尋ねたり、自分の子どもと同名の児童が附属学校にいることを知っている保護者が、その子どもと仲良くなるにはどうしたら良いか一緒に考えたという回答もあった。

表2 交流などに関する子どもとの話の内容（自由記述）

内 容	回答者数
特別支援学校の児童の名前を挙げて報告する	11
特別支援学校の児童が来たこと、一緒に遊んだことを報告するが、名前は出ない	8
特別支援学校の児童の変わった行動や困難なことについて言及する	3
交流についてはあまり話さない	3
特別支援学校の児童としてではなく、新しい友達ができたと話す	1
児童ではなく特別支援学校の先生について話す	1

#### (3) 合同運動会への参加

回答者全員が10月14日の合同運動会に参加しており、幼稚部の子どもの様子を見ていたことが示された。

#### (4) 特別支援学校の児童についての保護者の知識

保護者自身が特別支援学校幼稚部の子どもの顔あるいは名前をひとり以上知っている回答者は61.7%（29名）にのぼった。これは合同運動会等の参加だけでなく、保育園と幼稚部教員が協力して定期的に配布している「ともだちつうしん」「すまいるだいあり～」によるところが大きいと考えられる。

### 3.2 交流についての印象と成果

#### (1) 保育園で交流を行うことについて

交流を行うことについて5段階評価で尋ねたところ、

87.2% (41名) が「良い」、12.8% (6名) が「どちらかといえば良い」と回答し、「どちらでもない」や否定的な回答は全くなかった。自由記述形式による交流についての感想は、1) いろいろな個性・障害の子どもがいるという多様性の理解の場、2) 偏見を持たずに自然に交流する場、3) 様々な経験を通して子どもが成長する場、として交流を評価していることが明らかになった(表3)。また、「特別何か感じることはなく交流を拒否する理由もない」という回答があったが、他の項目の回答から、多様な児童がいることは自然なことであり取り立てて交流を意識する必要はないという趣旨であることが伺えた。

表3 交流に関する感想(自由記述)

交流について感じる意義など	回答者数
偏見を持たずに自然に交流する場	15
様々な経験を通して子どもが成長する場	11
いろいろな個性・障害の子どもがいるという多様性の理解の場	9
特別何かを感じることはなし	1

## (2) 行事を特別支援学校と一緒にすることについて

運動会のような行事を特別支援学校の児童と一緒にすることをどのように思うか尋ねたところ、85.1% (40名) が「良い」、12.8% (6名) が「どちらかといえば良い」、2.1%が「どちらでもない」と答え、否定的な回答は全くなかった。自由記述では、1) 交流の仲間として普通・自然なことという回答が最も多く、昨年度までと異なり今年度は保育園の児童も幼稚部の児童もが一緒に混じって競技を行ったことを評価するコメントも複数あった。また、2) 一人ひとりの頑張っている姿・楽しそうな様子を応援したい、3) 交流の様子を保護者が実際に知ることができたという回答からは、合同行事の児童への効果というよりも、参加する保護者自身への効果が伺えた。さらに、4) さらなる交流の場や、親同士の交流を望む声も複数あった(表4)。

表4 行事を特別支援学校と一緒にすることに関する感想(自由記述)

行事と一緒にすることについて	回答者数
交流の仲間として普通・自然なこと	13
一人ひとりの頑張っている・楽しそうな姿を応援したい	7
交流の様子を保護者が実際に知ることができた	3
さらなる交流の場や、親同士の交流を望む	3
その他	4

## (3) 障害のある子どもについて新たに知ったこと

障害のある子どもについて保育園を通して新たに知ったことについて自由記述で尋ねたところ、幼稚部の子どもの参加の様子を暖かく見つめる気持ちや、障害の有無は関係なく子どもは皆同じであるといったコメントが最も多かった一方で、「接し方について学びたい」「まだ壁を感じることががあるのでもっと身近に感じたい」「子どもたちだけでなく保護者側の交流も必要」という声もあった(表5)。

表5 障害のある子どもについて新たに知ったこと(自由記述)

新たに知ったこと	回答者数
頑張っている姿、かわいいらしい姿は皆変わらない	4
障害の有無は関係ないので	4
保護者の側がもっと学ばなければいけないことがある	3
障害の多様性を知った	1
その他	2

## 3.3 今後の交流についての意見

### (1) 今後の交流について

今後の交流については、93.6% (44名) の回答者が交流の継続を希望し、「どちらでもよい」は6.4% (3名)、継続に否定的な回答者はいなかった。

### (2) 今後に交流に期待すること

今後の期待について自由記述を求めたところ、偏見のない心でお互いを思いやって仲良く一緒に活動してほしいという願いが最も多く、夏祭りやバザーといった児童も保護者が一緒になった交流や保護者同士の交流や、週末に児童もを交えた交流会などの機会を設けて欲しいといった要望がここでも複数寄せられた(表6)。

表6 今後に交流に期待すること(自由記述)

今後の期待	回答者数
お互いを思いやって仲良く一緒に活動してほしい	19
児童も保護者が一緒になった交流や保護者同士の交流を期待する	5
より一層の交流の機会や、卒園後の交流を期待する	4
今までどおりの交流の形態が良い	3
その他	6

#### 4. 考 察

保育園児の保護者は、幼稚部との定期的な交流についてよく知っており、さらに、6割以上の保護者が特別支援学校幼稚部の子どもの顔あるいは名前をひとり以上知っていることが明らかになった。これは保育園と幼稚部教員が協力して定期的に配布している「ともだちつうしん」「すまいるだいあり～」によるところが大きいと考えられる。本年度は幼稚部幼児が登園する前日にはそのことと活動内容を子どもおよび保護者に掲示を通して伝え、さらに、交流の当日には通信を発行して活動内容や子どもの様子を伝えるなどを行なっていた。回答者全員が合同運動会に参加しており、園の活動に比較的熱心な保護者だったことが伺われるが、それ以外にも、保護者に向けた保育園や幼稚部の地道な働きかけが功を奏したと考えられる。

また、子どもから交流や特別支援学校の幼児について報告があったという回答者が6割近くいたという結果から、幼児にとっても交流が園生活の重要な一部となっていることが伺われる。同時に、幼稚部の子どもの遊びや活動、あるいは一人ひとりの様子についての家庭での保護者との会話は、幼児と保護者の双方にとって障害理解の機会を交流プログラムが提供していたと見ることができよう。

障害のある子どもについて保育園を通して新たに知ったことについては、障害の有無は関係なく子どもは皆同じであるという趣旨のコメントが複数あったが、交流を通して障害についての理解が深まった結果としてこのように感じるに至ったのかどうかについては本調査からは明らかではない。しかし、保育者養成の短期大学に在籍する女子学生を対象とした調査では、障害のある人々との接触経験や障害理解教育を通して学んだこととして、障害があっても自分たちと変わらないといった「既存の障害者像の転換」が最も多かったことが示されている（柳澤、2006）。このような知見を踏まえても、子どもの交流プログラムを通して保護者の障害理解が進んだと推測することに誤りはないと思われる。

また、本調査では、幼稚部の子どもの参加の様子を暖かく見つめる気持ちについて述べた回答も複数あった。柳澤（2006）は、接触経験や障害理解教育を通して、個々の障害の特性や実践的な支援方法に関する知識よりも、障害に対する偏見の解消や障害のある人々に対する思いやりの気持ちといった情緒的側面に影響を受けていると報告しているが、これは本研究で得られた保護者のコメントと共通している。さらに、接し方についての学習の機会や、子どもと保護者が一緒になった交流、保護

者同士の交流についての要望、子ども同士の交流の機会を増やして欲しいといった意見があったことから、交流プログラムは障害の受容性の増加だけでなく、より積極的な関与への志向性を高める後押しをしていたと言えよう。蔵野・濱端・浅野・飛永（2002）は、社会福祉専門職養成課程の学生に対して身体障害の障害理解に関するセミナーを継続して実施したところ、障害者への関心、継続学習への意欲の高まりが認められたことを報告している。1998（平成10）年より社会福祉施設および特別支援教育諸学校における介護等体験が求められるようになったことを含め、近年、障害理解教育が推進されている。障害のある幼児との交流を経験している子どもの保護者に対しても、障害理解に通じる間接的影響を与えているのだろう。

障害児と健常児とのかかわり行動は、自由遊び場面よりも、保育者の関与がより大きい設定保育場面の方が生じやすく、社会的相互交渉が起こっているときには、保育者の働きかけも頻繁である（小山・池田、1995）。また、障害のある幼児と遊んだ経験のある健常児では、遊び経験のない健常児よりも、障害のある幼児に好意をもつ割合が高く、また、言語的なかかわりよりも身体を使ってのかかわり＞を経験しているほど障害児と一緒に遊んだという＜遊び実感＞をもちやすい（高橋、1995）。つまり、保育者側の配慮と場の設定が、障害のある幼児とない幼児との交流を促進し、さらにこのような交流の実態を知った保護者に対して、障害に対する受容性を高めるという、保育者－幼児－保護者の間の相互作用があるのではないだろうか。

本調査では、回答者全員が交流について肯定的に評価している実態が明らかになった。少数意見の中には、保育者が幼稚部の子どもに関わることによって園児に目が届かなくなるようなことは避けてほしいという意見もあったが、交流について否定的なものではなく、子どもを園に預けている一保護者としての率直な気持ちと考えられる。今回の調査から、交流保育が幼稚部の子どもにとってだけでなく園児やその保護者にとってもプラスの面が大きいことが示された。同じ地域にある特別支援学校であっても、実際に足を運ぶ機会はほとんどなく、児童・生徒と顔を合わせることは希である。交流プログラム当日の送り迎えや合同行事への参加は、障害のある児童に実際に接する機会を提供した。また、園からの通信の果たした役割も大きい。さらには自分の子どもからの報告などで一層親しみを感じたであろう。

今回の調査は、交流を行なう前後や、交流を行なっていない園の保護者と比較しているのではない。また、回答者は全員が母親であったと思われる。今後は、交流経

験の有無による検討や、父親はどのような印象を持ち、交流が何らかの影響を与えていたのかについても明らかにする必要がある。

### 謝 辞

本研究にご協力いただいた、さいわい保育園の皆様、ならびに園児の保護者の方々に深謝いたします。

### 引用文献

- 9) 田川元康・本谷 望・津村幸子：障害児の統合保育に対する保育士の意識. 京都女子大学発達教育学部紀要, 2, 23-31, 2006.
  - 10) 高橋まゆみ：統合保育における障害児に対する健常児の理解について. 白梅学園短期大学紀要, 31, 113-124, 1995.
  - 11) 柳澤亜希子：保育者をめざす学生の障害に対する理解—障害のある人々との接触経験および障害理解教育との関連について一. 北陸学院短期大学紀要, 38, 123-138, 2006.
- 1) 橋本創一・浮穴寿香・工藤傑史・高野裕美・田口悦子・渡邊貴裕・安永啓司・大伴 潔・伊藤良子・細川かおり：特別支援教育における交流教育の評価に関する検討—東京学芸大学附属養護学校幼稚部の交流教育の実践を通して一. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 57, 439-446, 2006.
  - 2) 細川かおり・浮穴寿香・橋本創一・大伴 潔・工藤傑史・渡邊貴裕・田口悦津子・高野裕美：交流保育における障害児に対する保育所幼児の認識に関する研究. 鶴見大学紀要 第3部保育・歯科衛生編, 44, 71-76, 2007.
  - 3) 河内しのぶ・福澤雪子・濱田裕子：統合保育が保育士に与える影響：K市で統合保育を経験した保育士へのアンケート調査より. 産業医科大学雑誌, 28 (3), 337-348, 2006.
  - 4) 蔵野ともみ・濱端賢次・浅野いずみ・飛永高秀：障害理解のための学習方法に関する一考察. 人間関係学研究：大妻女子大学人間関係学部紀要, 3, 1-9, 2002.
  - 5) 三村保子・白石隆子：障害をもつ幼児の親が交流保育に期待すること. 西南女学院短期大学研究紀要, 47, 77-83, 2000.
  - 6) 三浦正樹：障害理解教育において重視されるべき内容に関する調査研究. 芦屋大学論叢, 38, 47-161, 2003.
  - 7) 小山 望・池田由紀江：統合保育における障害児と健常児の社会的相互作用の形成に関する研究—保育者の役割について一. 心身障害学研究, 19, 61-71, 1995.
  - 8) 大伴 潔・橋本創一・工藤傑史・高野裕美・田口悦津子・渡邊貴裕・浮穴寿香・細川かおり・伊藤良子・安永啓司：保護者と教員から見た交流教育における幼児の様子—東京学芸大学附属養護学校幼稚部の交流教育の実践から一. 東京学芸大学紀要総合教育科学系第58集, 427-435, 2007.